杉並景観録

第五号

SUGINAMI Keikan-Roku

SUGINAMI CITY

●発行日――平成11年3月1日
●発　行――杉並区都市整備部まちづくり推進課
TEL.3312-2111(代) 内線3515

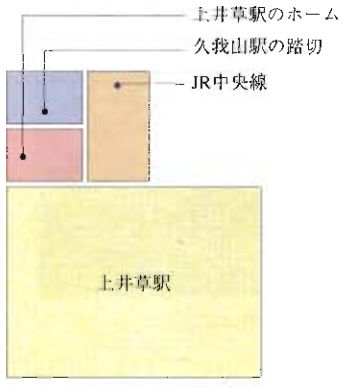
駅

幼い頃、母に手を引かれ電車に乗ることは、特別なおでかけだと思いました。

初めて通学定期を手にした時は、なんだか一人前になったような気がしました。

毎日の通勤ラッシュはうんざりしたけれど、通勤電車に乗らなくなると、あの喧噪が懐かしくなるから不思議です。

春は、卒業や入学の季節です。いつものように駅では、朝になるとひとびとが気ぜわしく駆け込み、夕方には足早に家路を急ぐ姿が見られます。それぞれの想いを胸に、通い慣れた駅を去るひと、新たに駅に訪れるひとが行き交います。



京王 井の頭線
Keio-Inokashira Line

大正二年に、京王電気軌道会社が笹塚―調布間を開通。昭和八年には帝都電鉄が渋谷―井の頭公園間を走る帝都線を開通。翌年に井の頭公園―吉祥寺間が開通しました。

帝都線の開業当初は、大宮八幡宮や井の頭公園の宣伝、永福町の宅地開発、さらに住宅資金低利貸付を行うなど、旅客を集めるための様々な策がとられたそうです。帝都線から井の頭線と改称されたのは、昭和十七年のことです。

戦後、京王電車と一体となり現在の京王電鉄になりました。

小さな待合室

（大西　路男　上井草在住）

井の頭線「高井戸駅」とその周辺は、昭和の初めから二十年代前半までは、一幅の絵になるような素晴らしい所でした。道路（今の環八）をまたぐため高架駅になっていて、東の浜田山からも、西の富士見ヶ丘からも二輛連結の緑色の電車が坂をあがってくるのです。駅の南側は神田上水に沿った広いたんぼで、田植えの時期から刈り取りまで変化に富んだ四季の色を見せてくれました。神田上水の水も澄んでいて魚も多く、子供達の泳ぐ姿もよく見かけました。ホームの真ん中にそれぞれ白い小さな待合室が建っていましたが、風雨の強い時は電車を待っているのが大変でした。また、駅の北側に今もある高井戸小学校の環八に面した校門の前は、昭和十年代には、有名な「高井戸杉丸太」のうっそうたる林でした。昭和三十年代に入ると、東京の地下鉄を掘った土でたんぼがどんどん埋め立てられていき、現在のような光景になりました。

昭和七年に時事新報社の読者投票で東京百名所に選ばれた「高井戸杉並木」がみえる。かつては江戸の建築用材をまかなう杉丸太の生産地だった。

営団地下鉄 丸ノ内線
Marunouchi Subway Line

路面電車から地下鉄へ

大正十年に西武軌道が青梅街道に淀橋―荻窪間を走る路面電車を開通しました。当時は、堀ノ内の妙法寺の参詣客で賑いました。

昭和二十六年に西武鉄道軌道線は東京都に譲渡され、都営杉並線となりました。昭和二十年代前半は、近郊農村への買い出しにも利用され、他の都内各系統路線のなかでも群を抜いて利用客が多い線でした。

昭和三十年代前半は、通勤・通学に最も利用されたのですが、後半になると、自動車が増加し、交通渋滞の原因にもなりました。昭和三十七年に地下鉄丸ノ内線新宿―荻窪間が開通し、翌年に都内で最初に廃止された都電となりました。

「がんばって」と、学生さんが手を振ってくれます。

ホームに溢れんばかりの乗客のなか、機敏に働くひとの姿は、ラッシュの光景に欠かせない存在です。営団地下鉄丸ノ内線では、平成十年十一月から二名の女性車掌さんが、日に三往復の業務をこなしています。

青木　以前は駅でインフォメーションの仕事でしたので座り仕事でした。それが立仕事に変わって、今は慣れましたが、最初は腰が痛くて大変でした。

岩崎　アナウンスをすると、お客様が一斉にこちらを見るので、初めのうちは車内を見ることが出来ませんでした。

青木　始発と終点の駅になる荻窪駅と池袋駅、および乗り換えの複雑な大手町駅などでは、とくにアナウンスに注意しています。一番神経を使うのは、ラッシュ時のドアを閉めるタイミングですね。

岩崎　杉並区内の駅は、学生さんが多いところだと思います。

青木　東京から荻窪方面に向かってくると、中野坂上駅でガラッと車内の雰囲気が通勤電車から通学電車へと変わります。

岩崎　はじめは遠巻きにしていた学生さんが、最近は「がんばって」と手を振ってくれたりすると嬉しくなります。

青木　本当にいろんな方から応援の言葉をいただいております。皆さんマナーが良いのも印象的です。仕事柄、駅から外に出ることは少ないのですが、一度荻窪や高円寺のまちを歩いてみたいですね。

青木 由美子
あおき　ゆみこ
平成9年4月1日に入団。
休日は車でドライブを楽しむ。将来は、地下鉄の運転もやってみたいと語る19歳。

岩崎　千佳子
いわさき　ちかこ
平成6年4月1日に入団。
晴れた日に、電車が地上に出ると視界が開けてホッとするという22歳。

『街角広場のある』風景
善福寺二丁目

善福寺公園の南、住宅街の中に不思議な四つ角があります。角に面した建物は四十五度振られ、四つ角の中心を向いて建っており、広場のようになっています。ここから南北に走る街路には桜並木があり、春には桜の花が美しく咲きます。

この一帯は、関東大震災直後、震災復興事業の一環として計画的に開発された住宅地です。

大都市における過密による住環境の悪化は大正時代の東京においても既に大きな問題となっていました。同様の問題に直面していた欧米の諸都市では、大都市の周辺に自然に囲まれた郊外住宅地をつくることによって解決する方法が提案、実践され、日本にも紹介されていました。時あたかも大震災によって多くの人が家屋を失いその復興が急務となりました。当時、田園地帯だったこの場所に住宅地をつくるにあたり、街角広場、街路樹、地区の集会所、児童公園等を配する等、理想の郊外住宅地をつくろうとした当時の都市計画担当者の意気込みが偲ばれます。

街角広場に面して、この地区の町会の集会所であるさくら会館があります。現在約二百二十軒の家で構成されるさくら町会は戦前からあり、今でも町会のおよそ半分は戦前からの住民です。地域活動も活発で、春は花見、夏は街角広場で盆踊りと、この街並を活かした町会のイベントが催されています。

（大嶋アトリエ　大嶋信道）

戦前の街角広場（大正14年頃）
「佐藤滋著　集合住宅団地の変遷」より

現在の街角広場（平成10年）盆踊りの日。
写真左の建物がさくら会館。中央の街路に桜並木が見える。
撮影：さくら町会植田政男氏

すぎなみ／ひと／まちなみ

SPECIAL EDITION

駅からまちへ まちから駅へ

京王井の頭線沿線では、線路沿いを散歩する園児に電車が軽やかな汽笛を送る光景が見られる。

杉並区には、四本の鉄道と一本の地下鉄が通っています。沿線のたたずまいもそれぞれに異なります。

西武新宿線が走る杉並区の北部は、昭和七年に区画整理が終了した地区です。

中央線は、区内を南北に二分するように走っています。高架になった線路からの眺めは、低層な住宅の屋根が延々と続き、まるで屋根の展覧会のようです。

南には、神田川をはさんで京王線と京王井の頭線があります。この沿線は、高校や大学が多い所です。

宮団地下鉄丸ノ内線では、夏には七夕飾りの笹が、秋には鈴虫が改札口で迎えてくれる駅があります。季節感を失わない駅員さんの心遣いが感じられます。

平成十年九月に区内の駅と風景にまつわる思い出を募集しました。寄せられた数々のエピソードとともに身近な駅について振り返ってみたいと思います。

JR 中央線 JR Chuo Line

明治二十二年に甲武鉄道が新宿―立川間を開通、二年後に荻窪駅が区最初の駅として開業しました。明治三十四年の時刻表によれば、上下線とも一日に九本の運行で、荻窪―新宿間の所要時間は約二十一分でした。当時の多くのひとびとは、新宿まで二時間近く掛けて歩いていたのです。

その後、明治三十九年に、甲武鉄道が国有化され中央線となりました。大正十一年に高円寺・阿佐ケ谷・西荻窪駅が同時に開業しました。

中央線は都市近郊では珍しく、東中野から立川まで地図の上では一直線です。畑地のため買収や建設がし易く、東京に多摩地域の特産物を迅速に運ぶ輸送効率の良いルートとして選ばれたと思われます。甲州街道や青梅街道沿いの鉄道建設の計画が住民の反対により今の場所につくられたという説もあります。

西武 新宿線 Seibu-Shinjuku Line

昭和二年に、西武鉄道が東村山―高田馬場間を開通。川越まで全線電化を完成、電車運転を始めました。当時の区画整理組合が用地交渉にあたり、区内に三駅を作ることを条件に格安な買収に応じました。こうして、開通と同時に下井草・井荻・上井草駅の三駅が誕生したのです。

昭和二十七年に高田馬場―西武新宿間が開通し、現在のように西武新宿線と呼ばれるようになりました。

中央線の通勤電車

（深見　周三　松ノ木在住）

昭和十八年、馬橋四丁目（現在の高円寺北三・四丁目）で過ごしました。中央線の北側で日当たりに恵まれ、高台でしたが、井戸を掘ると良質の水が溢れました。狭い庭に植木や四季を通じて楽しめる花木類を植え、勝手口にはブドウ棚を設けました。後に、この勝手口から大きなヒキガエルの訪問というなんとも嬉しい出来事がありました。

昭和三十年代からの高度成長期の中央線の通勤電車は、混雑率が三〇〇パーセントと言われていました。そんな折、女性・子供用の専用車両が加わり都心に通う者のシンボルとなりました。高円寺駅から溢れた人々が北口広場に群れをなし、順繰りに改札口からホームに押され、既に満杯になった電車に我先にと乗り込んだものでした。ドアが閉まれば、身動きひとつ出来ずドアのガラスに頬を押し付けられた人達が毎日眺められる混雑ぶりでした。車両に冷房が付いたのは、それからだいぶ後のことです。私がこのような満員電車で長年丸ノ内の会社まで通勤することが出来たのは、町内に樹木が多かったお陰だと思います。

ケヤキの並木道

（吉田　篤史　中野区白鷺在住）

地下鉄南阿佐ケ谷駅からJR阿佐ケ谷駅を越えて、阿佐谷北六丁目の交差点まで続くケヤキの並木道は、阿佐谷の街に欠かすことのできない風景であり、都内でもなかなか出会えない立派な並木道です。そして、ケヤキ並木は四季折々に表情を変えることによって、都会の生活では失われがちである季節感を阿佐谷の街にもたらしてくれているのです。生まれてからずっと阿佐谷にいたのに、このことに気付くまで二十年近くもかかりました。

昭和36年　通勤ラッシュの阿佐ヶ谷駅ホーム

下井草の駅が出来た昭和二年は、戦争へ歩み始める兆しが感じられる不安な世相でした。まちにも、家を建て渋る雰囲気が漂っていました。当時の自治会役員の間で、駅を明るくするものを植えたいという話が持ち上がりました。そこで、自治会が一本百円だった細い若木十数本をまだひとつだったホームの両側に植え、西武鉄道に寄贈したのです。

月日が流れまちに住むひとも増え、ホームの拡張や交番の建設などのため、半分以上が伐り取られました。桜の花は好かれても、落ち葉の掃除は大変です。植えたときの気持ちを想えば、伐られることは寂しいですが、これもまた時代の流れで仕方が無いことだと思います。一年を通して、木が好かれるのはなかなか難しい事ですね。

駅に植えた桜

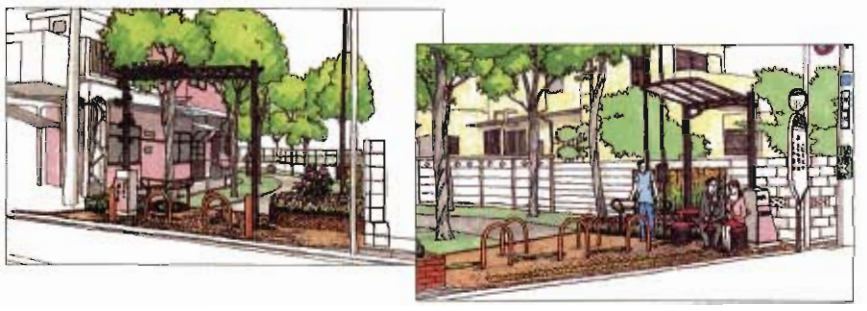
（森田　佐一　下井草在住）

下井草駅の桜、毎年この桜を楽しみにしている人も多い

参考：杉並区立郷土博物館発行「杉並の交通物語」

N E [杉並景観録] W S

●まちかど修景整備



「井草中学校」バス停（上井草2丁目25番）付近の修景整備を行います。この事業は、魅力的なまちかどづくりを目的として、平成8年度から始まりました。中通り公園（桃井1丁目33番9号）の修景整備に次ぐ工事です。

●景観まちづくり情報展

平成10年12月に区役所1階中央ロビーで、景観まちづくり情報展を開催しました。全国各地の様々な景観まちづくりの取り組みを地図や写真を織り混ぜながら紹介したものです。

この情報展は、10月に区立産業商工会館で開催し、11月にはパシフィコ横浜会議センターで開催された「第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム」に出展したものです。

師走の慌ただしいなか、区役所を訪れたひとびとが遠くのまちに想いをはせていました。

第7回 杉並『まち』デザイン賞

まちで見つけたちょっと素敵な建物・趣のあるまちかど・個性的なお店などまちの雰囲気づくりに一役かっているところをお知らせください。皆さんの推薦をもとに選定し、表彰します。自薦・他薦を問いません。

●推薦対象
杉並区内に現存する建物（住宅・店舗など）
工作物（看板・柵・ベンチ・植え込みなど）
地域活動（まちなみを魅力的に演出している団体など）

推薦方法などの詳細は、広報でお知らせします。

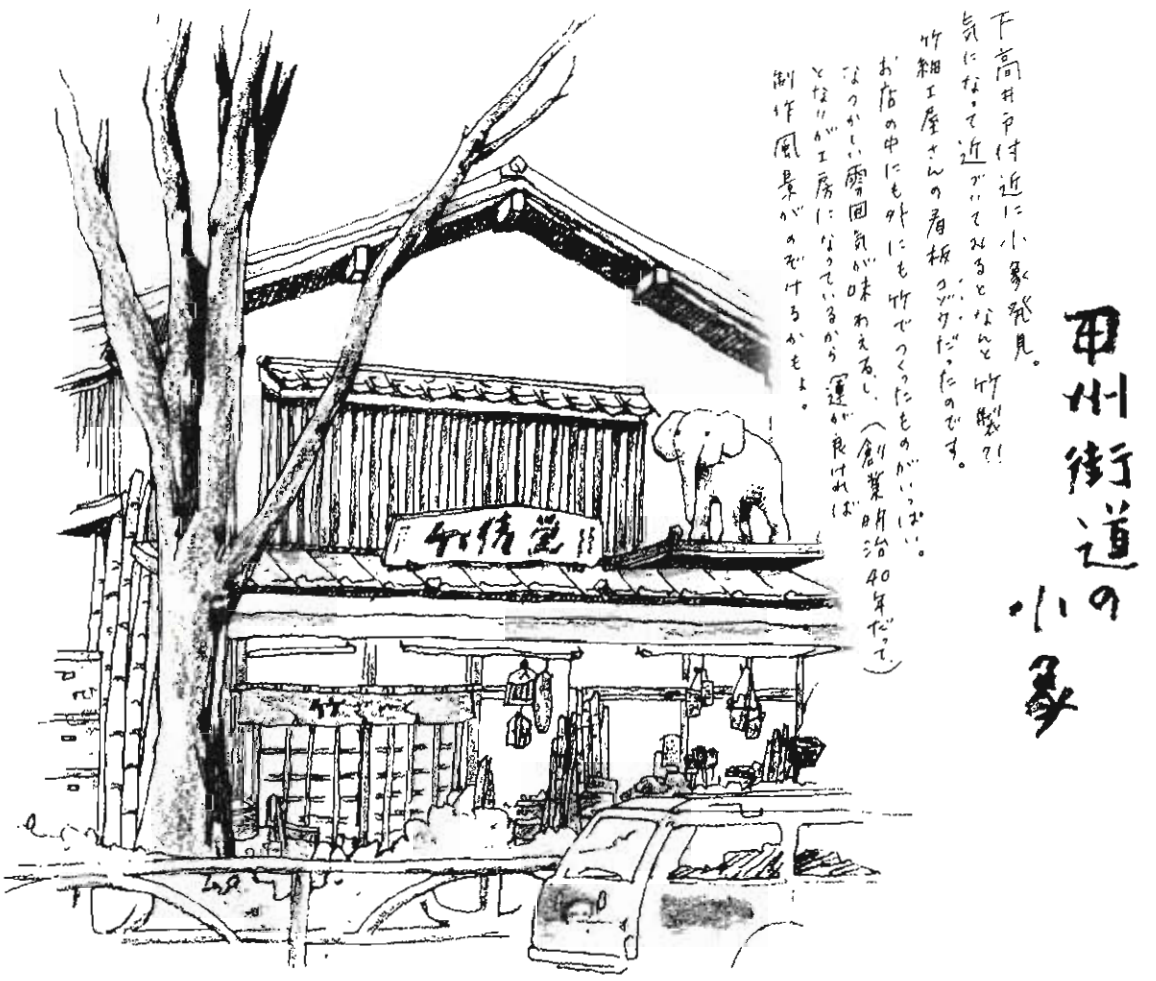
●東京電機大学公開授業

東京電機大学建築学科の3年生が、区立産業商工会館で昨年の10月24日に課題地域のまちの現状と問題点を、今年の1月18日にはまちづくりプランを発表しました。夏に、カメラを片手に自らまちに足を運び、地域の人々の話を集めながら考えたプランです。

この試みも今年で4回目を数えます。今回は、課題地域が従来の阿佐谷地区から大田黒公園・荻窪駅周辺・蚕糸の森・久我山地区の4ヵ所に変わり、多彩な内容となりました。会場には、公開授業に初めて参加するまちのひとも多く見られました。

TOPICS

●まちかどスケッチ



●散歩の途中で

道ばたにポツポツと黄色いタンポポが、姿を見せ始めました。その多くは、ヨーロッパから入ってきたセイヨウタンポポです。古くから都内にあるカントウタンポポとの違いは、花の付け根にある総包片の向きで見分けることが出来ます。総包片が下へ反り返っているものがセイヨウタンポポ。総包片が花を包むようにぴったり重なっていて、角状突起というトゲが出ているものがカントウタンポポです。今では、あまり見ることが出来なくなったカントウタンポポを探しに出掛けてみませんか。

（参考　杉並区発行「すぎなみの街と自然」）

編集後記

たくさんのひとと風景に出会い、あらためてまちの懐の深さを実感。もうすぐ春、散歩に出掛けたくなる季節です。

編集・DESIGN／女子美術短期大学造形科情報デザイン専攻（白幡　香織）　イラスト／AKIKO MITO